【漢検研究奨励賞】佳作

辻という字について

会社員　岡本　和子

1.はじめに

司馬遼太郎の「功名が辻」がNHK大河ドラマになり、書名の知名度がずいぶんあがった。「辻」という言葉が「功名」の後につく。意味深長であまり一般的ではない表現だ。中国でも台湾でもNHKの番組が見られるためだろうか。司馬遼太郎の作品は中国人にも人気がある。ドラマについて中国人と話をするうち、「功名が辻」をどう中国語で表現しようかと迷ったことがあった。

中国のテレビ番組表には以下の名称で記載されていた。(日本では2006.12.10最終回)

《功名十字路口》(KOUMYOUGATSUJI)
中文名称:功名十字路口
英文名称:KOUMYOUGATSUJI

また中国のインターネットの検索で《功名十字路口》を探すと以下のような説明が見つかる。

辻(平仮名:つじ／音:TSUJI／中国的意思是:十字路口)
「"辻"字 字典里就没有了。」(辻という字は辞典には載っていない。)(注1)

最近では辞海に「辻」という漢字が載っていて、中国語として逆輸入されて使えるらしいと聞いていたが、名前以外ではまだ一般的ではないようだ。私が中国語を習った25年前は「辻」という字は現代中国語の辞書にはなかった。中国語を教わった辻本先生が「私の姓にある辻という字は国字だから中国の発音はなく、辻をSHÍと勝手に名乗っている」と言われていたのを思い出す。同様の事例であり、阿辻哲次氏がわかりやすく解説をしているものがあるので、以下に紹介する。

漢字の作り方をまねて日本人が作った漢字を、「国字」という。私の姓に使われている「辻」はそんな国字の一つである。国字は日本でできた漢字だから、中国での読み方がない。しかし中国では山田さんがシャンティエン(Shāntián)と呼ばれ、小泉さんがシャオチュエン(Xiǎoquán)と呼ばれるように、日本人の名前が、中国の発音で読まれる。だから私は中国で自己紹介するときに「辻」という字についての説明をしなければいけないので、ほかの人よりもたくさんの時間がかかる。ちなみにそんなときはしかたなく、ツクリの位置にある≪十≫の中国語音「shí」を使うしかない(注2)。

近年日本企業が中国に進出し、日本人が現地で働く数は増えた。身近な中国駐在員に辻と名のつく方は多い。皆SHI(2声)と名乗っておられる。名前からドラマの題名まで、辻という漢字が街にあふれ活躍している。そこで「辻」の字に関して考察することとした。

2.辞書上の意味

「辻」が日本の辞典にどのように解説されているのか、まずは一般的なものから調べてみた。

【大字源】

「辻」　国字　つじ

字義　つじ。十字路。交差点。また、みちばた。路上。「四つ辻」「辻切り」

解字　会意。意符の辵(みち)と、意符の十(十字形の意)とから成る。十字路、「つじ」の意。

参考　中国に逆輸入されて用いられ、現代中国語でshíと読まれる。

古訓　中古　ツジ・ツムジ　中世　ツジ・トシ・トモ　近世　ツジ(注3)

【大漢和辞典】

国字 つじ。

イ　十字路。[和漢三才圓會、藝才、倭字]辻、街衢*之字、蓋十、東西南北、从レ辵、會意也。

ロ　みちばた。路傍。街上。

[辻祭][辻斬][辻商][辻占][辻番][辻風][辻駕籠][辻講釈][辻説法]

(用例は多数のため、解説を省略)

*《「衢」は四方に分かれた道》人家などの立ち並ぶ土地。町。ちまた。(大辞泉 増補・新装版)(注4)

【日本語源大辞典】

[辻]名　「つむじ」の転。

1、道路が十文字に交差している所。よつつじ。十字路。　※十巻本和名抄　P934

2、路上。みちばた。多く、「辻講釈」「辻占」などと、熟して用いられる。　※枕10C終

[語源説]

1、ツムジの略＜言葉の根しらべ＝鈴江潔子・大言海・日本語源＝賀茂百樹＞。

2、ツジ(十路)の義か＜俗語考＞。

3、「十字」の音から＜名言通＞。シフシ(十字)の義＜言元梯＞。

4、ツはアツマルのツ、チはミチのチ＜日本釈名＞。

5、ツドヒヂ(集路)の義＜和句解・日本語源学＝林甕臣＞。

[参考]

「下総本和名抄」に「俗用辻字＜都无之＞未詳」とあり、「斯道文庫本願経四分律平安初期点」に「巷陌の四衢道の頭(ツムシ)とあるように、「つむじ」の変化したものとされる。その「つむじ」は頭髪のツムジ(旋毛)と関係すると見られるが、十字路の辻は、早くから「つじ」が一般的になっていたと思われる(注5)。

【箋注倭名類従抄】

十字

呉均行路難云、縦横十字成二阡陌一、今案十字者東西南北相分之道、其中央似二十字一也、俗用二辻字一、本文未レ詳、

中略

又辻、皇國所レ製會意字、中山傳信録、有二辻字一、琉球國用二皇國俗字一也」下總本無二本文二字一、有二都无之三字一、今俗呼二都之一、(注6)

【同文通考巻之四】
辻　ツジ　街也(注7)

中国の辞典には、以下のように解説されているものがある。

【現代汉語詞典】
辻　shí　日本汉字,十字路口。多用于日本姓名(注8)。

以上が字の意味についての記述である。いずれの辞書からも辻は主に十字路、みちばたという意味であることがわかる。

またインターネットで国字を検索すれば「和製漢字の辞典」というのがあり、『国字の字典』飛田良文 監修・菅原義三 編を引き継いでいるとの旨の記述があった。一般の多くはインターネットを利用することを意識して紹介する。「辻」の項には以下のような解説がある。

> 『名義抄(観智院本)』に「ツムシ」、『明応五年版節用集』・『易林本小山板節用集』に「ツジ」、『増刊下学集』・『拾篇目集』に「ツシ」、『撮壌集』に「辻子　ツシ」、『運歩色葉集』に「ツシ」・「辻子　ツジ」また「辻固　ツジガタメ」、『大谷大学本節用集』に「ツジ　路」また「辻固　ツジガタメ」、『音訓篇立』に「シウ音　ツシ　ツムシ」、『玉篇要略集』に「ツシ　シウ」、『和字正俗通』に「ツジ」とある。『和字正俗通』は4画の「しんにょう」である。『拾篇目集』には、「辻」のほか「しんにょう」に「一」から「九」までの数字を組み合わせた文字が載っているが、「九」以外は『中華字海』などにない(注9)。

ここでは『運歩色葉集』(室町時代)をひいて「辻固」という用例があげられている。これは辻の警備、警護という意味である。大漢和辞典には採用されていなかった用例である。

一方、大漢和辞典では「辻番」(用例:江戸時代)を採用している。意味は今の交番、派出所のようなものである。

3.姓名　地名

姓名、地名として使われているものについては、その例には多くの資料が存在する。

1、太田亮著『姓氏家系大辞典』第二巻　角川書店(1963)(注10)

辻　ツジ　尾張、甲斐、常陸、下野、岩代、播磨、讃岐、丹波、美作等にこの地名存す。

とあり、辻氏については清和源氏善積氏族から、丹波・河内・紀伊・美濃・佐渡・播磨・阿波・筑後・薩隅の辻氏に至るまで非常に多くの記述がある。詳細は『姓氏家系大辞典』を参照されたい。

2、エツコ・オバタ・ライマン著『日本人の作った漢字』南雲堂（1990.10.27）（注11）
（以降「ライマン（1990）」という。）
①地名にあらわれる国字P134には辻の地名が記述されている。

国字：辻
地名例：辻村（京都）
年代：1532～1555
出典：勧進奉加帳
辞書とその成立年：倭名類聚鈔934

②P108～P109には『日本地名索引』（注12）から68字を紹介している。その中に辻があげられている。
③苗字にあらわれる国字P152では、苗字に関して述べられているが、正宗敦夫編『地下家伝』（日本古典全集刊行会、1938）（注13）、『姓氏家系大辞典』（注14）に代表される書物が存在するとしている。

3、一海知義『知っているようで知らない漢字』講談社（1991.1.5）（注15）
（以降「一海（1991）」という。）

現に「辻」という苗字は日本人に多いので、中国人に接触する「辻さん」も多いのか、中国人は「十」の発音をとって「シ辻」とよんでいるようです。
なおついでにいえば、日本人が「毛沢東」のことを「マオズオドン」といわず「モウタクトウ」と日本式によぶように、中国人も「田中角栄」のことを「タナカカクエイ」といわず「ティエンジョンジャオロン」とよぶので、「辻」という苗字も「シ辻」とよぶのです。辻という苗字は比較的多く、中国でもかなり以前から知られるようになったのか、『辞海』という代表的な辞書に「辻　日本字、読んで子期（ズチ）の若（ごと）し、十字路なり」と見えます。

3、「一海（1991）」によれば1991年の時点では『辞海』に「辻」が掲載されているようである。1、『姓氏家系大辞典』2、「ライマン（1990）」からは姓名、地名の辻は、古くは室町時代には記述として残されていることがわかる。姓名については前述1、和田系図等に、善積氏族　満政（平安中期）次男、忠隆流辻氏（忠隆→斎頼→惟家→基斎（辻源太郎兵衛尉）→惟斎（辻五郎）→家斎次男、基正→維正（辻氏））の記述がみえる。尊卑分脈には「満正が六世の孫・善積先生家斎―源太基正―維正（辻五郎）」との記述がある。地名においては、前述2、①の辻村（京都）1532～1555の記述がある。

4.国字

まずわかりやすい解説なので一海氏の文章を以下に引用する。

ここでとりあげた「国字」については、すでに江戸時代の学者新井白石（1657-1725）が定義をくだして、次のようにいっています。

国字トイウハ、本朝ニテ造レルトコロニテ、異朝ノ字書ニ見ヘヌヲイフ。故ニ其訓ノミアリテ、其音ハナシ。(『同文通考』巻之四、凡例)

すなわちまず第一に、国字とは、本朝(日本)で造ったもので、異朝(中国)の字書には見えぬ字だ、というのです。

中略

新井白石の定義の第二項は、「訓ノミアリテ、其音ハナシ」。私たちが漢字の「音」とよんでいるのは、漢字が中国から渡ってきたとき、同時に伝えられたその字の中国音、それを今日に伝えたものですから、もともとは中国の発音です。したがって、日本製の国字に「音」のあるはずがありません。あるのは日本式訓み方、すなわち「訓」だけです。

たとえばさきの対話に出てきた、辻(すべる)、辻(つじ)、裃(かみしも)、これらも「訓」があるだけで、「音」はありません。「一海(1991)」(注16)

国字は、初めて新井白石が「中国の字書には載っていない、音のない文字」という定義を行っているということがわかる。そして『同文通考』巻之四、凡例に例として「辻」があげられているということである。

次に、エツコ・オバタ・ライマン著『日本人の作った漢字』1990.10.27(注17)(本文では、「ライマン(1990)」という。)という一冊の本を紹介したい。アメリカの大学で教鞭をとっていた著者が学生に国字について説明を求められ、本格的な研究に踏み切ったという経緯をもつ。研究の対象は実際の海外生活で役に立つものである。漢字文化圏では各国独自の漢字があるということを外国にいるときにこそ感じる。日本人なら海外で一度は聞かれ、調べたことのある内容ではないだろうか。

この著書の中にも「辻」が紹介されており、新井白石が国字としているものだという。すでに「ライマン(1990)」(注18)、「一海(1991)」(注19)や本文でも **2.辞書上の意味**の部分で、『同文通考』巻之四を引用しているので参照いただきたい。以降、中根元圭の『異体字弁』(1692)、山本格安『和字正俗通』(1733)にも「辻」は国字として掲載されている。新井白石が最初に国字と認定して以来「辻」は国字として定着している文字ということがわかる。

笹原宏之「国字が発生する基盤」『国語文字史の研究七』和泉書院　2003.11.15所収(以降、「笹原(2003)」という。)によれば「国字」というのは新井白石『同文通考』以来の用語としている。

2.辞書上の意味のところにあるように、「辻」は国字として分類は辞書類には会意と記述されていることが多い。さらに国字のどのような種類のものかを、エツコ・オバタ・ライマン、笹原宏之、2氏の文章の中からもう少し詳しく見てみたい。

以下に笹原氏の漢字と国字の分類表をあげる。

表　漢字と国字の分類

形義	現象	分類	例字
中・中型	象形ほか	中国製漢字	木
中・日型	衝突	日本製字義(国訓)	椿(つばき)

中・日型	派生転用	日本化字義（国訓）	首（おびと）
日・中型	変形	日本化字体	歯
	用法差	日本化字体・日本化用法（日本製漢字）	椙
	偏旁付加置換	日本製字体	
	用法差	日本化字体・日本化用法（日本製漢字）	蕷
	会意ほか	日本製漢字	鴫
	合字	日本製漢字	畠
日・日型	会意ほか	日本製漢字	榊

「表で日本製漢字としたものが国字とよばれている文字の中心をなすと考えられる。中日型の衝突は、日本製漢字との意図があっても、漢字という静態としてとらえると、結果的に国訓に分類される。用法差とするものには、漢字が具有した字音を失うという現象を含む。」「笹原（2003）」(注21)

「辻」では十の部分、ジュウという漢字が具有している音を失っている。漢字では辻の十字路の意味を表すには十字と二字で表現しなくてはならない。とすれば日本製漢字、一字となって音を失ったということになる。しかしすでに「街」「衢」など同義・類義の一字の漢字がありながら、なぜ造字する必要があったのだろうか。以下に笹原氏の言葉を引用する。

「筆録者は、すでに中国にも同じ意味の漢字があることに気付いていても、自らその字体に派生的な意味や新規の意味（いわゆる国訓の一つ）を付与することがあったであろう。また、同じ字体の漢字があることを認知していても、より表現効果の高い文字を作ることもあったであろう。」「笹原（2003）」（注22）

「辻」には高い表現効果が付与されている。道とその形状を明確に表現し、同義・類義の「街」や「衢」にはない視覚的な表現力がある。

「また、国字を造字する際に、六書のうちで、中国では字数の少ない会意という方法を選ぶことが多かったのであろうか。」「笹原（2003）」（注23）については以下のような解説がある。

「日本では、造字の際には字音ではなく、字訓を表記することを主な目的とし、それに適した会意が好まれたという特徴が見出せるが、日本が全く独自の創造を行ったわけではなく、漢字の模範とされた国々での文字作製と運用の実情を反映したものであった。ことに中国の六朝時代や朝鮮の三国時代以降の造字、異体字、とりわけ会意による俗字が、日本での国字製造の気運とその方法に影響を与えたことが想定される。」「笹原（2003）」（注24）

次にエツコ・オバタ・ライマン氏の国字の分類表をあげる。

国字の分類表

（1）発音を示す漢字素で構成されたもの

a　発音（音読み）を示す漢字素の結合 ――― 磨（まろ）　粂（くめ）

b　漢字の形声文字の構成と同様 ―――― 鰊(こう)

c　発音（訓読み）を示す漢字素の結合 ―― 鰯(いわな)　裃(かみしも)　褄(つま)

（2）意味を示す漢字素から構成されたもの ―― 峠(とうげ)　働(はたらき)

（3）漢字素が略されたもの ―――――― 匂(におい)　（儿(くん)）　（斗(かさ)）

（4）漢字素が簡略化して出来たもの ―――― 凧(たこ)　凪(なぎ)　凩(こがらし)

（5）中国語での概念の統合と省略によるもの ―― 辻(つじ)　簗(やな)

（6）一部の漢字素が変換したもの ―――― 苹(ふもと)

（7）漢字素の増加によるもの ―――― 籏(はた)

（8）草書体から再生したもの ―――― 俣(また)　糀(くましね)

「（1）a（3）（5）（6）（7）（8）の分類に入る国字は漢字の原字にもどれるわけであるから、その原字との比較の点から国字構成を観察することが出来る。（1）cと（4）は熟字訓から出た国字としての観察が可能である。この八項中一番多く国字が属するのは（2）である。（2）は一般的に漢字の原字もないし、熟字訓からも来ていないので漢字素の構成が唯一の鍵である。しかも（2）の国字はその概念をもつ漢字をなぜ借用しなかったかのなぞを解くのがむずかしい文字群でもある。」「ライマン（1990）」（注25）

「（5）中国語での概念の統合と省略によるもの―辻　」は漢字の原字に戻れる字という。以下に説明部分を引用する。

「中国語を基準にして国字を観察すると、熟語表記でする中国語の概念を略して一字にして生まれた国字構成があるのに気がつく。辻がその例である。中国語では十字路と表記するが、日本では道が交差する様子を十という文字で残し、字と道を略し、辶（道を行くの意）を加えて辻と作字した。」「ライマン（1990）」（注26）

十の中国語の意味は①数字の10、②十分な、完全な、③多くの、である。（中日大辞典）「十字路口」の省略として考えれば、東西南北、四方に別れる道の十字形をした交差点をイメージできる。偏は道を表す。中国語の「十字路口」四字を「辻」が一字で一語を表現している。一字で一語を表現しようとすることが、国字を生み出す原動力である。一字で表現効果の高い文字を作るという、国字固有の性格をみることができるのである。漢字に対して、より高い表現効果を求めて造字することは、日本だけの話ではない。中国、朝鮮、すべての漢字圏の国々で共通のものであったと考えられる。詳しくは、笹原宏之「国字が発生する基盤」『国語文字史の研究七』和泉書院2003.11.15を参照されたい。

5.辻のテキスト入力と漢字表

現在では、パソコンのテキスト入力の際に辞書がよくなり、入力、表示に困るということはめったになくなった。

2000年3月にJIS X0213-2000(JIS2000)が規格化され、JIS X0208-97(JIS97)とあわせて、第3・第4水準漢字および非漢字が追加された。JIS X0213-2004もあるそうだ。

25年前、私が学生だった頃は外字登録が必要となり入力にとても時間がかかっていた。今なら外国語主体のテキスト入力で、和文・欧文・中国語(繁体・簡体字)混植になった場合や、オペレーションシステムの関係で、国字がすぐに出なくて困ることがあるくらいである。その時「辻」はJIS第一水準文字、区点:3652、SJIS:92D2なのだとあらためて認識する。登録も簡単で、いずれかの辞書には載っているので、日頃使いやすいように一度呼び出して登録をするなど整理しておけばよい。ただしコンピュータごとにフォント実装が異なるので出力にはまだ工夫が必要な場合もある。

現在「辻」はJIS第1水準漢字で、常用漢字には含まれない。常用漢字表になければ「辻」の字を学ぶのはいつくらいになるのであろうか。少しさかのぼって考えてみたい。

高梨信博「付録　小学校学年別配当漢字の変遷表」『漢字講座第12巻　漢字教育』(昭和63年2月25日)明治書院P297―327(以降「高梨(1988)」という。)には小学校で学習する漢字の変遷が説明されている。第1～第6期にわたって、教科書の配当漢字を小学校の何年で学習するかを表にしたものである。表には「小学校令施行規則」または国定読本にあって「常用漢字表」にないもの(*印で示される182字)が入っている。(注27)。

第一期(明治37年度～)　尋常小学読本
第二期(明治43年度～)　尋常小学読本
第三期(大正7年度～)　尋常小学国語読本
第四期(昭和8年度～)　小学国語読本
第五期(昭和16年度～)　よみかた初等科国語
第六期(昭和22年度～)　こくご国語

表を一瞥したところ、常用漢字外の漢字はほとんど第4期まで、遅くても第5期まででほとんど姿を消している(注28)。「辻」は第5期、昭和16年～の『よみかた初等科国語』の学習漢字からは含まれていない。第2期では6年生、第3期では3年生、第4期では3年生で学習したようである(注29)。**表1**は「高梨(1988)」から辻の部分、第1期から6期までをまとめたもので、⑥は6学年、③は3学年を表す。

表1

漢字	1期	2期	3期	4期	5期	6期
辻		⑥	③	③		

以下**表2**に国定読本用語総覧1巻から10巻(注30)より、「辻」の用例を一覧にしてみた。期は高梨信博「付録　小学校学年別配当漢字の変遷表」に示されているものと同じである。

表2

期	年度	字	底本	ページ	行	用例文
1	『尋常小学読本』明治37年度以降使用	辻	—	—	—	—
2	『尋常小学読本』明治43年度以降使用	辻	『尋常小学読本』明治43年7月21日翻刻発行 日本書籍	目 81	7 3	辻音楽
				81	6	＜略＞、身にはつづれをまとひ、やせ衰えた體を義足に支へて、路ばたにバイオリンを弾いて居る老人の**辻音楽**師がある。
3	『尋常小学国語読本』大正7年度以降使用	辻	『尋常小学国語読本』大正8年8月25日翻刻印刷　大正8年12月5日翻刻発行　東京書籍る　国立教育研究所教育情報資料センター教育図書館蔵本	89	5	私は町の**辻**にたってゐる郵便箱であります。
			『尋常小学国語読本』大正9年10月9日翻刻印刷　大正9年10月25日翻刻発行 日本書籍11　国立教育研究所教育情報資料センター教育図書館蔵本	56	2	＜略＞、北風寒き町の**辻**、身なりいやしき老婆には、手をかす人もあらざりき。
			『尋常小学国語読本』大正10年4月16日翻刻印刷　大正10年4月30日翻刻発行 日本書籍11国立教育研究所教育情報資料センター教育図書館蔵本	17	9	石垣の間でも、地蔵様のかげでも、**辻堂**のえんの下でもさく。
4	『小学国語読本』昭和8年度以降使用	辻	『小学国語読本』昭和10年7月22日翻刻印刷　昭和10年8月17日翻刻発行 東京書籍ほ　横須賀市教育研究所蔵本	98	5	それよりも、あの風に、**四辻**で火事を消し止めたのは、えらいてがらです。

期	年度	字	底本	ページ	行	用例文
5	『ヨミカタ』『よみかた』昭和16年度以降使用	辻	『初等科国語二』昭和17年7月10日翻刻印刷　昭和17年8月25日翻刻発行　東京書籍を　大分県立大分図書館蔵本	73	9	それよりも、あの風に、**四つつじ**で火事を消し止めたのは、えらいてがらです。
6	『こくご』『国語』昭和22年度以降使用	辻	—	—	—	—

「辻」については、第4期、5期では、用例文に同様のものが使用されている。第4期の用例文「それよりも、あの風に、**四辻**で火事を消し止めたのは、えらいてがらです。」は第5期では四つつじとなっている。第5期では辻は平仮名で表記され、漢字として学習することはなかった。戦後、常用漢字外の漢字を学習することはなくなったと言ってよいと思われる。

大正12年5月9日官報3230号付録雑報に載っている常用漢字表には「辻」が入っている（注31）。第三期（大正7年度～）尋常小学国語読本では常用漢字として学習しているということになる。

『尋常小学国語読本』大正7年度以降使用には用例文が3種あがっている。まさに「町の**辻**」の用例である。司馬遼太郎（1923年8月7日-1996年2月12日）は大正12年生まれの作家である。第三期の小学三年生で辻を学んでいる最後の年代になる。「功名が辻」という用法は、人々が交錯する町の**辻**、**四辻**としての意味からも「辻」を認識していなければ使えないように思える。初等教育は漢字の意味を考えるためのきっかけを与えるため、言葉の理解の深さと無関係ではないと思われる。

6.おわりに

もともと「辻」は苗字や地名などとしても古くから多くあり、認知度は高い。教科書に載っていなくても、学校で習う機会がなくても読み書きには問題ないと思われる。ただ現在のようにメールなどを打つ際に自動で出てくる漢字を使っているだけでは、「辻」の深い意味を知る機会はあまりないと思われる。時代劇に出てくる辻斬りか、大河ドラマの題名でお目にかかるくらいになっているのかもしれない。

中国語で「十字路口」と訳される「辻」が一字で荷う意味は大きい。同義の「街」より視覚的にもわかりやすい。多くの人生が交錯する巷、人生の重大な分れ道、等含みの多い言葉としての役割を荷っている。もっと多くの人にそうした意味を知ってもらいたい国字である。

注釈

1、sina 新浪 BLOG 2006年大河劇《功名十字路》簡介 http://blog.sina.com.cn 2006-06-06 01:28:45 机器猫s(2006年12月時点の番組解説、サイト内検索)

2、阿辻哲次著『部首のはなし』中公新書1755 2004.7.25

3、大字源(東京:角川書店,1992.2)10079 P1736

4、諸橋轍次著 大漢和辞典 大修館書店 38711 P11543

5、前田富祺著 日本語源大辞典 小学館 P766

6、狩谷棭斎著 箋注倭名類従抄 巻三 居處部 道路類 印刷局蔵版 明治16年4月 P51

7、新井筑後守源公白石先生著 新井白蛾祐登 補校 同文通考巻之四 宝暦十庚辰年九月 P4

8、中国社会科学院語言研究所 詞典編輯室編 現代漢語詞典 第5版 商務印書館(2005.北京)P4233

9、著者:大原 望、編集協力:福田 雅史 和製漢字の辞典
http://homepage2.nifty.com/TAB01645/ohara/index.htm
http://homepage2.nifty.com/TAB01645/ohara/kensaku.htm

10、太田亮著『姓氏家系大辞典』第二巻 角川書店(1963)P3756

11、エツコ・オバタ・ライマン著『日本人の作った漢字』南雲堂(1990.10.27)

12、金井弘夫編『日本地名索引』(1981)

13、正宗敦夫編『地下家伝』日本古典全集刊行会(1938)

14、太田亮著『姓氏家系大辞典』角川書店(1963)P3756

15、一海知義『知っているようで知らない漢字』講談社(1991.1.5)P96

16、一海知義『知っているようで知らない漢字』講談社(1991.1.5)P94,95

17、エツコ・オバタ・ライマン著『日本人の作った漢字』南雲堂(1990.10.27)

18、エツコ・オバタ・ライマン著『日本人の作った漢字』南雲堂(1990.10.27)P26

19、一海知義『知っているようで知らない漢字』講談社(1991.1.5)P94,95

20、笹原宏之「国字が発生する基盤」『国語文字史の研究七』和泉書院 2003.11.15 P21―P38

21、笹原宏之「国字が発生する基盤」『国語文字史の研究七』和泉書院2003.11.15 P22

22、笹原宏之「国字が発生する基盤」『国語文字史の研究七』和泉書院2003.11.15 P24

23、笹原宏之「国字が発生する基盤」『国語文字史の研究七』和泉書院2003.11.15 P21

24、笹原宏之「国字が発生する基盤」『国語文字史の研究七』 和泉書院2003.11.15 P28,29

25、エツコ・オバタ・ライマン著 『日本人の作った漢字』南雲堂1990.10.27 P185～P188「6国字に見る日本人の知恵―中国の表記をどう日本語化したか」による。

26、エツコ・オバタ・ライマン著『日本人の作った漢字』南雲堂1990.10.27 P179

27、佐藤喜代治編『漢字講座第12巻 漢字教育』明治書院1988.2.25

高梨信博「付録　小学校学年別配当漢字の変遷表」P297―327

28、佐藤喜代治編『漢字講座第12巻　漢字教育』明治書院1988.2.25高梨信博「付録　小学校学年別配当漢字の変遷表」による。

P307、表上段7によれば、戦後、小学校の国語の教科書に載っている常用漢字外の漢字は「硯」（5年生で習う）の一字のみである。表3は「付録　小学校学年別配当漢字の変遷表」から硯の1期から6期部分を取り出したものである。表3の期の内容は本文P9にあげているので参照いただきたい。また、国定読本用語総覧の期と同じものである。⑤は5学年を表す。

表3

漢字	1期	2期	3期	4期	5期	6期
硯					⑤	⑤

第6期まで残っている硯についてだが、国定読本用語総覧10巻　第6期　昭和22年度以降使用P679では「すずりばこ」で出てくる。**表4**は国定読本用語総覧1巻―10巻より硯の記述を抜き出し表にしたものである。

表4

期	年度	字	底本	ページ	行	用例文
1	『尋常小学読本』明治37年度以降使用	硯	『尋常小学読本』明治36年7月28日印刷、8月1日発行	11	2	スズリ
2	『尋常小学読本』明治43年度以降使用	硯	―	―	―	―
3	『尋常小学国語読本』大正7年度以降使用	硯	―	―	―	―
4	『小学国語読本』昭和8年度以降使用	硯	『小学国語読本』昭和12年8月4日翻刻印刷　昭和12年8月20日翻刻発行　東京書籍と　横須賀市教育研究所蔵本	5 5	4 5	竹の**御硯箱**は何のかざりもなく、筆・鉛筆等、小学生の用ふる物と異なる所なし。 昭憲皇太后の**御硯箱**は、ふたの裏に石盤をはめ、石筆はちびてわづかに寸余を残すのみ。

期	年度	字	底本	ページ	行	用例文
5	『ヨミカタ』『よみかた』昭和16年度以降使用	硯	『初等科国語六』昭和18年7月13日翻刻印刷　昭和18年8月4日翻刻発行　東京書籍わ　大分県立大分図書館蔵本	7	9	竹の**御硯箱**は何のかざりもなく、
				8	1	昭憲皇太后の**御硯箱**は、ふたの裏に石盤をはめ、石筆はちびてわづかに寸餘を残すのみ。
6	『こくご』『国語』昭和22年度以降使用	硯	『国語』第五学年下　昭和23年1月7日翻刻印刷　昭和23年1月30日翻刻発行　日本書籍　国立教育研究所蔵本	87	8	手紙を書こうとして、すずりばこをあけた父にこういわれたら、水さしに水をいれて持っていくだろう。

第6期の硯の用例はひらがな表記である。国定読本用語総覧10巻凡例P10の部分によれば、「第六期国定読本は、戦後の混乱の中で非常に急いで編集され、印刷されたものらしく、随所に誤植らしきものが見られる。」そうである。また編纂趣意書も教師用書も存在しないとある。当用漢字表は同本、解説P6に昭和21年11月16日、内閣訓令第7号、内閣告示第32号によると記載されている。この当用漢字表には、辻も硯も掲載されていない。このようにみると、第6期にある硯の字は戦後の混乱の中で非常に急いで編集され残った可能性が高い。調査の時期によってはすずりばこと修正する前の教科書という可能性もある。「付録　学校学年別配当漢字の変遷表」は1988年調査のもので、私がみた国定読本用語総覧10巻は1995年発行のものである。よって、戦後、小学校の国語の教科書に載っている常用漢字外の漢字はなくなったと言ってよいと思われる。

29、佐藤喜代治編『漢字講座第12巻　漢字教育』明治書院1988.2.25高梨信博「付録　学校学年別配当漢字の変遷表」P318、表中段22参照。

30、国立国語研究編『国定読本用語総覧』三省堂　巻1―10巻　1985.11-1995.7

31、吉田澄夫　井之口有一編『明治以降国字問題諸案集成』　風間書房　1962.7.15　所収。